

**第2回AYAがんの医療と支援
のあり方研究会 学術集会
ポスター発表内容
(2020年3月20・21日)**

小児・AYA世代のがんについての認知度調査(東京都食育フェア2018・2019)

寺内恵美子、青山瑞希、佐伯佳恵、張嘉妙、濱中綾子、高井佳奈子、赤松ひなの、折原芽生、鈴木礼子
所属：日本女子大学 家政学部 食物学科

【背景】 小児・AYA世代がん経験者は治療後も様々な課題に直面している。その現状を社会の理解が進むために周知していく必要があるが、小児・AYA世代がんの患者数は、他年代に比べて少なく、その抱える課題はあまり知られていない。例えば「AYA世代(Adolescent and Young Adult)」の意味についての認知度調査(2017年:岡山市:食育推進全国大会)では99%の方が知らなかったと答えていた。

また、小児がん経験者が抱える晩期合併症などの困難についても、認知度が低い現状が考えられるが、小児がん患者が抱える課題についての認知度を調査した報告は、少ない。

【目的】 小児・AYA世代のがん患者の課題について情報提供し、周知活動を行うこと。
また、小児・AYA世代のがん患者が抱える現状の課題などについての認知度を横断的に調査し、性別や年代別に検討し、今後の小児・AYA世代がん患者の啓発・支援活動に役立てることを目的とした。

【方法】 大学生と小児がん患者団体との連携による東京都食育フェアにおける「認知度アンケート調査」

調査日時:2018年11月10日、11日、2019年11月9日、10日

場所:代々木公園ケヤキ並木通り

調査対象者:2018年、2019年度東京都食育フェアの本学ブース来訪者でアンケート参加に同意した男女。

小児・AYA世代のがんについて、一般の方へわかりやすい媒体を作成・紹介し、啓発活動を行った。並行してブース来場者へ自記式アンケートによる小児・AYA世代のがんにかかわる、以下の情報の認知度について横断的に調査した。

質問項目は以下の通り。

- ①「AYA世代」という言葉の意味
- ②治療後の晩期合併症の可能性
- ③希少疾患であるために治療開発が遅れていること(2019年のみ)
- ④小児がんは約7～8割が治ると言われていること(2019年のみ)

統計解析はJMP PRO ver.14で対象者の属性(性別、年代)に検討した(統計学的有意水準 $p < 0.05$)。本研究調査は日本女子大学の倫理委員会の承認で行われた。

【結果】

- 2018年ブース来訪者のうち認知度アンケートに回答し調査参加に同意した855名のうち、年齢・性別が明らかな835名を対象とした。**【表1】**
- 2019年ブース来訪者のうち認知度アンケートに回答し調査参加に同意した1033名のうち、年齢・性別が明らかな945名を対象とした。**【表2】**

➤全体:2018年**【図1】**
2019年**【図2】**

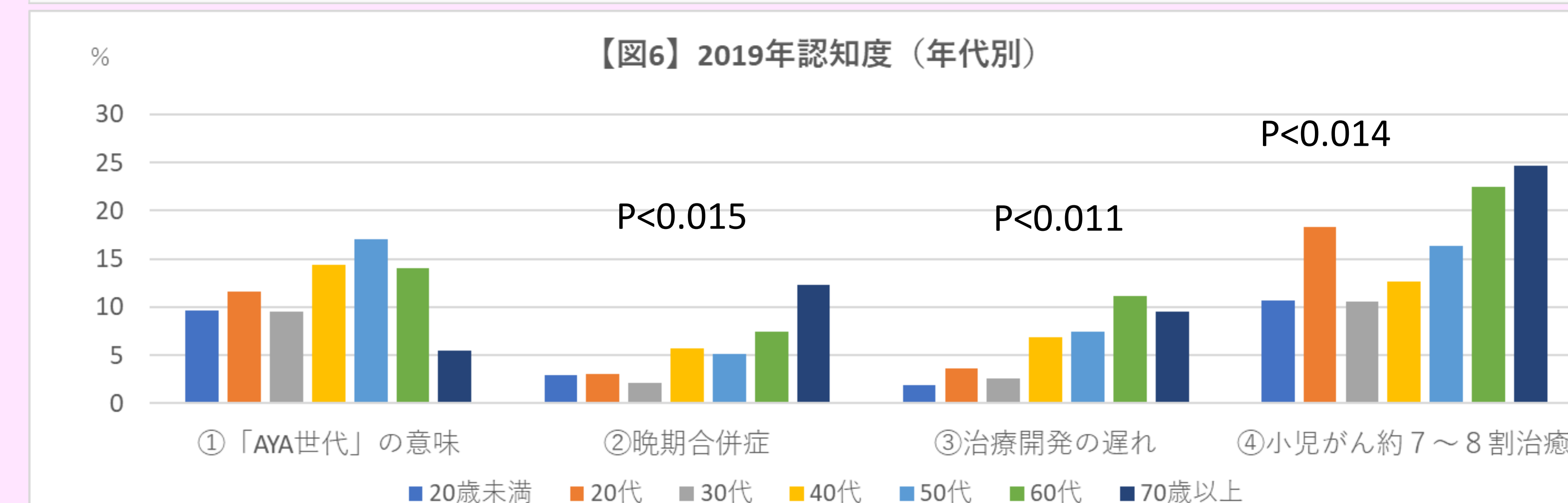
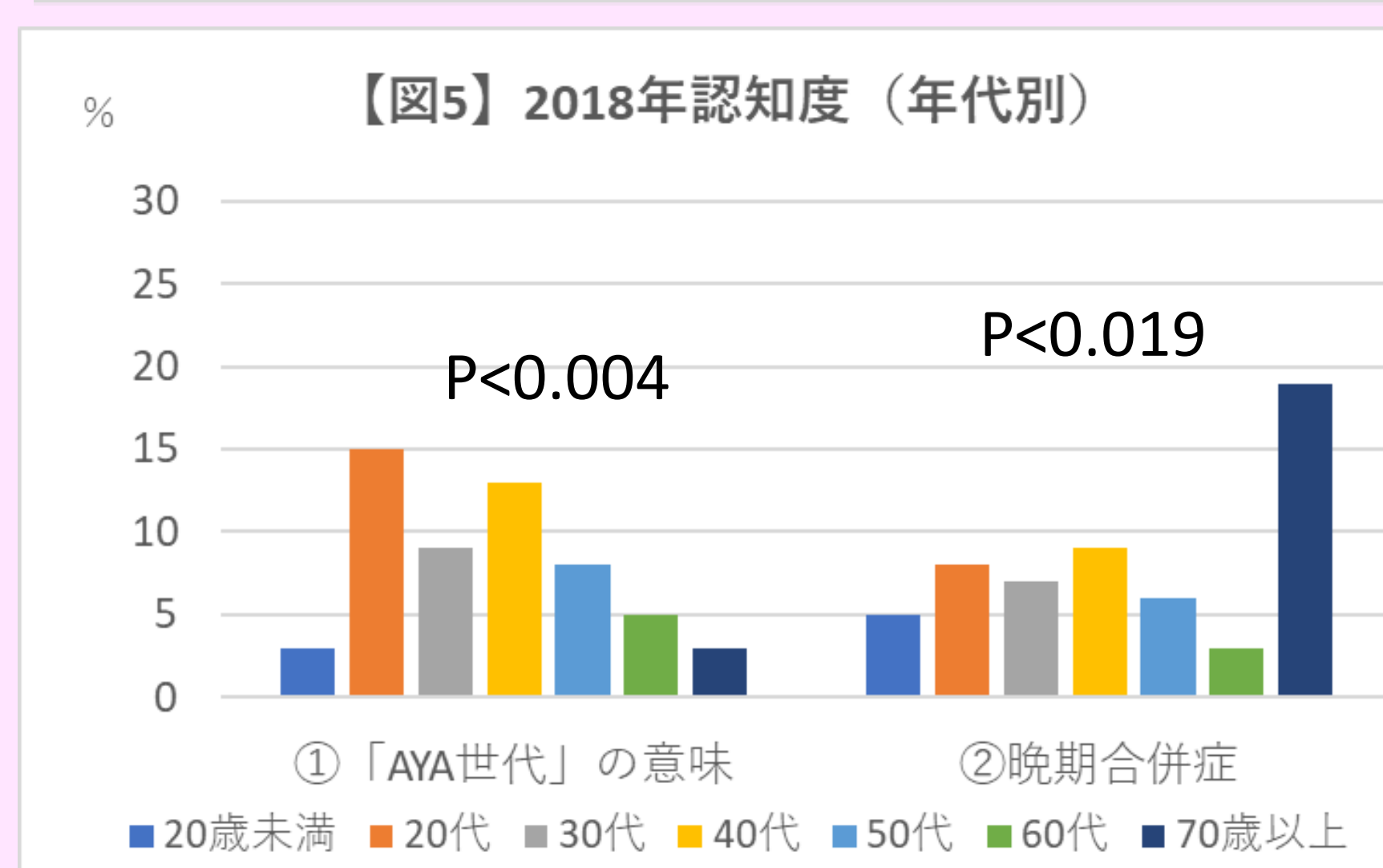
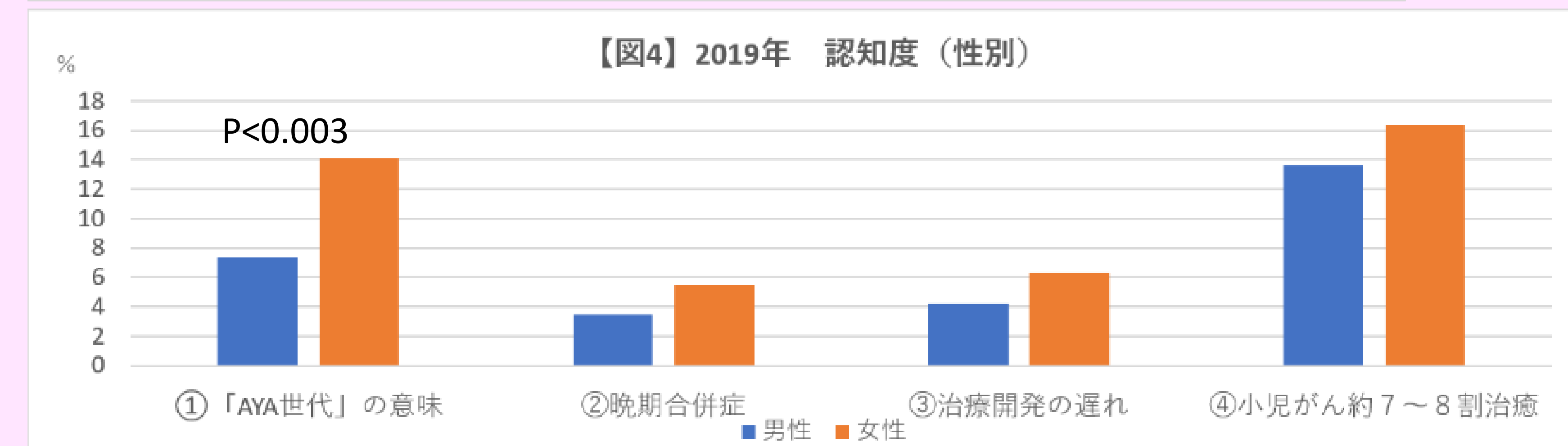
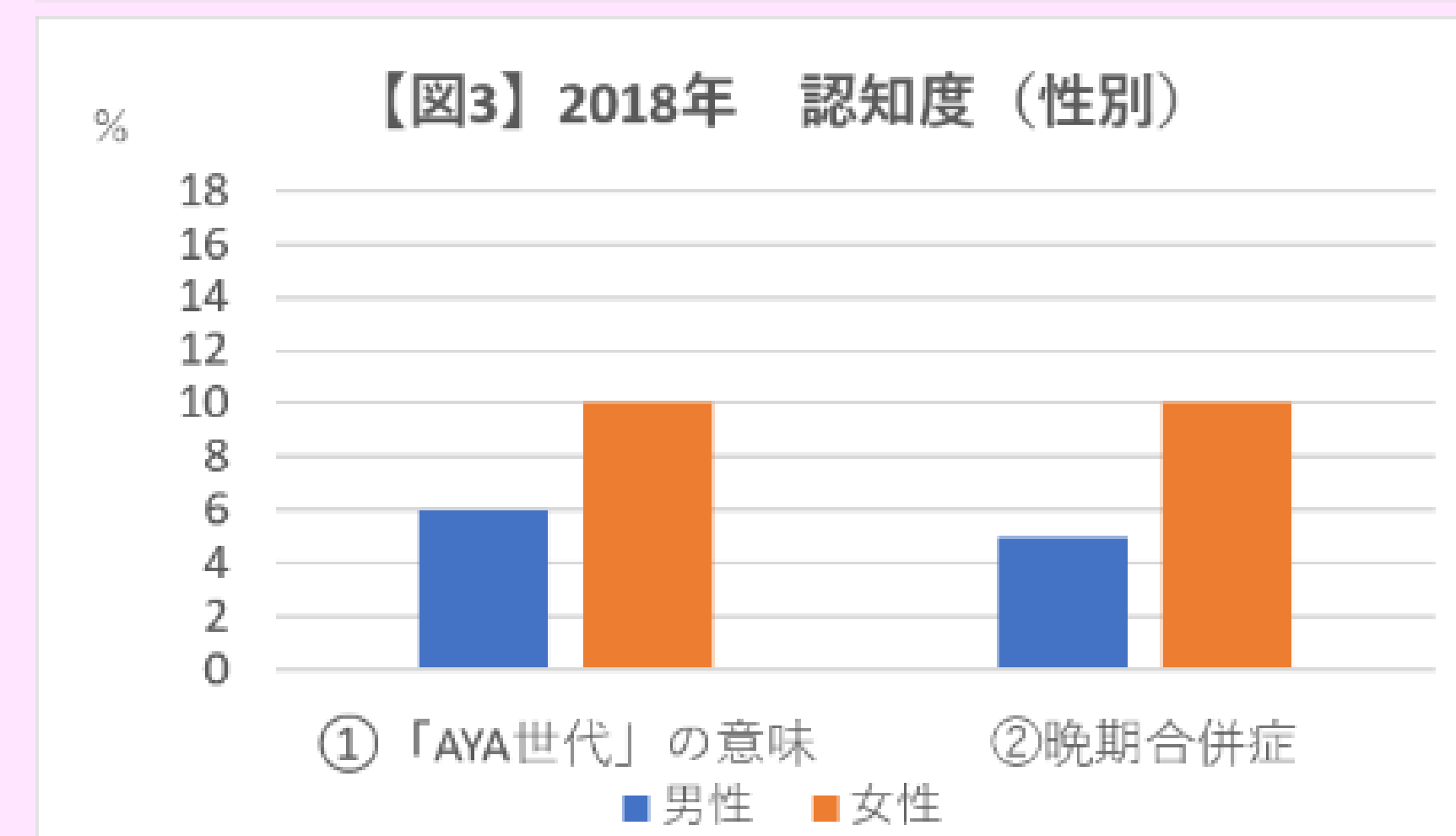
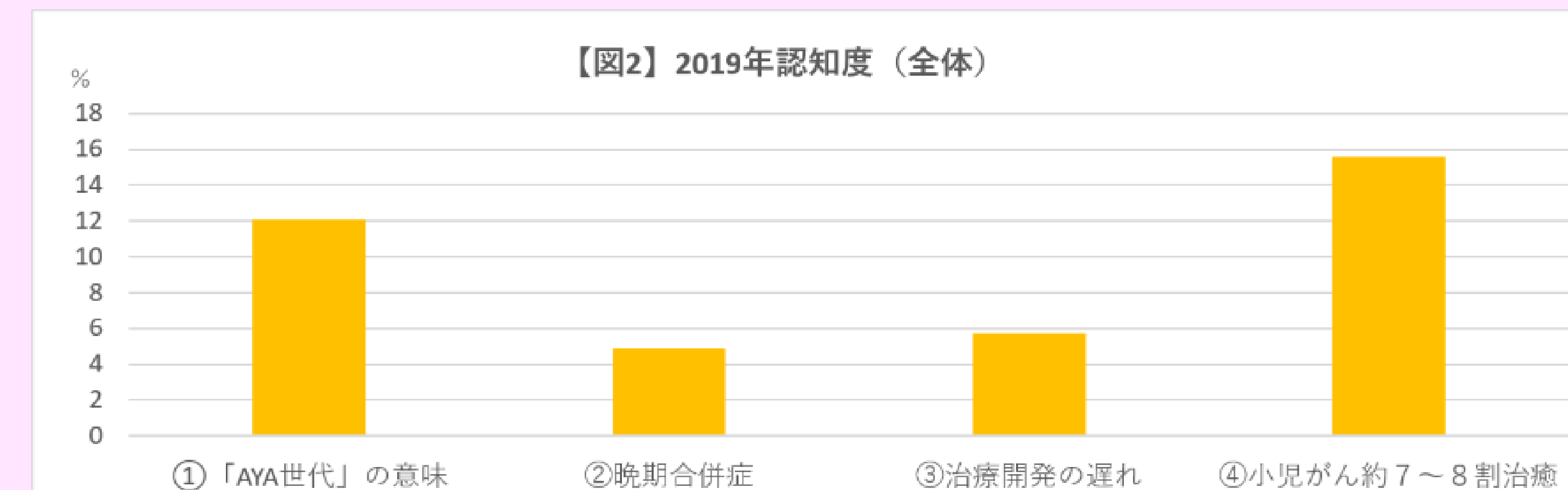
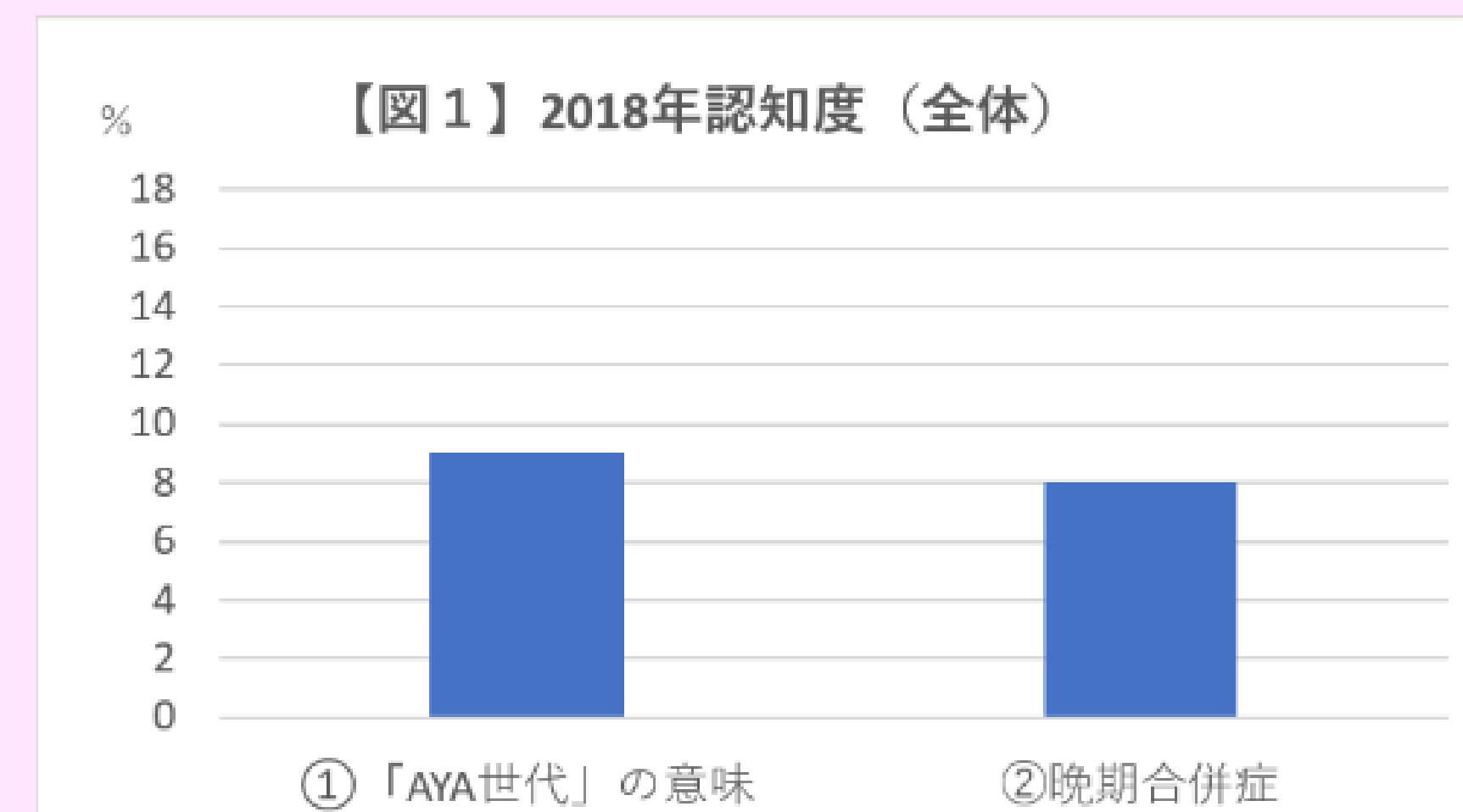
➤性別:2018年**【図3】**
2019年**【図4】** 質問項目①で男性に比べて女性が統計的有意に認知度が高い。

➤年代別:2018年**【図5】**質問項目①②で統計的有意差が観察された。
2019年**【図6】**質問項目②③④で統計的有意差が観察された。
①AYA世代という言葉の認知度は、年代別で統計学的有意差はなかったが、それ以外の質問項目②③④では、40代以降の年代で認知度が高い傾向があった。

【謝辞】一般社団法人全国栄養士養成施設協会 NPO法人キャンサーネットジャパン 後援/神経芽腫の会
【発表者のCOI開示】演題発表内容に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはございません。

【表1】2018年	20歳未満	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	計(名)
男性	14	30	57	40	39	20	20	220
女性	92	121	120	118	78	42	44	615
計(名)	106	151	177	158	117	62	64	835

【表2】2019年	20歳未満	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	計(名)
男性	16	37	69	51	39	44	30	286
女性	87	127	120	123	96	63	43	659
計(名)	103	164	189	174	135	107	73	945



【考察】 全体として、①～④項目の認知度はいずれも2割に満たなかった。しかしながら、①「AYA世代の意味」についての認知度は、過去の東京都食育フェアでの調査と比較すると、2017年度は約4%、2018年度は約9%、2019年度は約12%と年を追う毎に高まりつつある結果であった。2019年度では女性が男性と比べて認知度が高い傾向が観察されたが、これは男性よりも女性の方が健康意識が高く、「AYA世代」という言葉に触れる機会が多く、関心を持ちやすい傾向があるためかもしれない。

年代別では2019年度において「①AYA世代の意味」以外、②③④について、40代以降の年代で認知度が高い傾向であったが、年齢を重ねるごとに、出産・育児・親の介護などの経験を通して「がん」という疾病に関わる機会が多くなり、知識を得て、認知度が上がった可能性が考えられる。

これらの結果から、特に男性や若い世代の方々への認知度を高めるような、積極的な情報提供活動を考えて、すすめていく必要がある。今回、大学生が小児がん患者団体と協働して、ともに小児・AYA世代がん患者の情報を提供することで、対象者だけでなく、調査を行った大学生自身も小児・AYA世代がん患者への理解が深まる良い機会となった。

治療を終えて社会に出ていく小児・AYA世代がん経験者は、様々な課題に直面しており、継続的支援が必要とされている。そのためには、できるだけ多くの方に現状の抱えている課題を知っていただき、社会の理解が進むための周知活動の継続が必要と考える。